

成人慢性期の事例を用いた看護過程演習における教育効果 — 紙上患者と DVD 教材の比較 —

佐藤 栄子¹⁾ 小野 千沙子²⁾

¹⁾ 足利工業大学看護学部 ²⁾ 高崎健康福祉大学保健医療学部

要旨

【目的】 成人慢性期の紙上患者事例と DVD 教材を用いた演習による看護過程演習の教育効果を比較することである。

【方法】 対象は A 大学看護学科の 2 年生で、グループワーク形式での看護過程演習を行い、演習後に質問紙調査を行った。演習の内容は、平成 24 年度の 83 名には研究者らが作成した紙上患者を用いた紙上患者演習、平成 25 年度の 83 名には市販の DVD 教材事例を用いた DVD 教材演習を行った。学生には演習の有用性、満足度、グループメンバーとの協力度、演習で学んだ内容などを尋ね、演習別に比較した。

【結果】 学生の演習の有用性に対する評価は DVD 教材演習が有意に高く、満足度も高い傾向にあった。

【結論】 DVD 教材では視覚的な情報量が多く、臨地実習経験の少ない学生が患者をイメージしやすいことから、学生の評価が高かったと考えられた。今後は、学生の看護過程展開能力をさらに向上させるため、演習方法の改善や教材開発を進めていく必要性が示唆された。

キーワード：成人看護学，慢性期，看護過程演習，教育効果

I .はじめに

心疾患，糖尿病，がんなどの慢性疾患は，20 世紀半ば以降，日本の主な死因として注目されるようになり，今後も慢性疾患の有病率が増加していくことが危惧されている。そのような背景から，看護基礎教育において，学生が慢性疾患と共に生きていく患者の特徴や抱える問題を理解し，その問題解決に向けて看護援助するために十分な基礎的能力を養う教育が求められている。この根幹をなす看護過程を展開する能力は，患者一人一人に応じた質の高い看護を提供

するために看護師が獲得すべき能力のひとつ¹⁾である。

成人看護学における看護過程演習の先行研究は数多くあり^{2)~10)}，その教育効果として，学生の演習前後の自己評価から看護過程を展開する能力の変化を検討したもの^{2)~5)}，看護過程演習で学んだ内容を明確にするもの^{6),7)}，看護過程演習上の困難に関するもの^{6),8)}，看護過程演習の実習での有用性を分析したもの^{9),10)}などがある。これらにおいて看護過程演習は看護過程を展開する能力の向上に効果がある一方で，学生

は依然として看護過程の展開に多くの困難を感じていることが明らかになっており、効果的な教育方法の検討が必要である。看護過程の展開の中でも、学生が困難を感じやすいのは、アセスメントであり^{5),8)}、その原因として、学生にとって多くの看護過程演習で用いられている紙上患者では患者の具体的なイメージがつきにくく、アセスメントを困難に感じていることが考えられる。臨地実習の経験が乏しい学生が患者をイメージして看護過程を展開するためには、指導上の工夫が必要であり、例えばそのひとつとして視聴覚教材を用いること⁸⁾が挙げられている。視聴覚教材は基礎看護学領域から専門看護学領域まで、あらゆる授業で活用されており¹¹⁾、看護過程の学習でも用いられている^{4),6),12)}。しかし看護過程の学習に関して効果に言及したものは少ない¹²⁾。

そこで我々は、学生が成人慢性期患者の全体像を捉えて、適切な看護診断を導くための方策として、DVD教材を導入することとした。本研究では、成人慢性期看護過程演習にDVD教材を導入することによる教育効果を、紙上患者事例での看護過程演習と比較し、今後の成人慢性期における看護過程演習に関する教育に示唆を得ることを目的とする。

II. 方法

1. 研究対象

研究対象は、A大学看護学科の平成24年度と平成25年度の2年生、それぞれ83名、合計166名であった。

2. 対象者の学習上のレディネスと演習の位置づけ

A大学看護学科では、成人慢性期看護に関連する科目として、2年生前期に「成人看護学概論」が開講され、学生は成人期にある人々の成長発達の特徴、成人の生活と健康に関する基本的知識を基盤とした、成人期のライフスタイルや環境から生じる健康問題と健康レベルに応じた看護のアプローチ方法を学んでいる。

演習を実施した科目は、2年生後期の「成人看護学方法Ⅰ（慢性疾患・がん看護）」（2単位30回）であり、様々な慢性疾患やがんによって生じる健康問題を理解し、成人期の特性や健康問題の性質を考慮した看護援助方法について学ぶことを目的とした科目であった。3年生前期からの臨地実習での実践力を高めることを目的に、当該科目の終盤に看護過程演習を行った。

3. 演習の実施方法

表1に平成24年度の紙上患者事例を用いた演習（以下、紙上患者演習群）と、平成25年度のDVD教材を用いた看護過程演習（以下、DVD教材演習群）の概要を示した。どちらの演習もグループワークとし、ひとつのグループが学生5～6名となるよう編成した。

表1 紙上患者とDVD教材を用いた看護過程演習の概要

	紙上患者演習群	DVD教材演習群
学習目標*	1. 慢性疾患やがんなどの様々な健康問題をもつ対象者の看護過程の展開方法と問題に応じた看護方法を理解できる 2. グループ学習を通して、学生同士が協力しながら、問題解決能力を向上することができる	
グループ編成*	1グループ5～6名の15グループ編成	
事例患者疾患	慢性閉塞性肺疾患、肺がん、脳梗塞、 筋萎縮性側索硬化症、関節リウマチ、 乳がん、卵巣がん（7事例）	気管支拡張症、 急性骨髄性白血病（2事例）
演習の進め方*	病態関連図⇒事例患者の関連図⇒看護計画立案⇒発表会	
発表時間	90分×4回	90分×2回
発表内容*	・各グループで作成した関連図と計画を発表資料として配布 ・事例患者の看護診断と看護計画を発表	
発表の仕方	・1グループあたり発表15分、質疑応答5分 ・教員は1事例発表終了毎に評価コメント ・全てのグループが看護診断と看護計画を発表	・同左 ・同左 ・1事例につき2グループは看護診断と看護計画を発表するが、残りのグループは相違点のみを発表

*学習目標、演習の進め方、グループ編成、発表内容は両群とも共通

紙上患者演習群では2名の教員で、慢性閉塞性肺疾患、肺がん、脳梗塞、筋委縮性側索硬化症、関節リウマチ、乳がん、卵巣がん患者の7事例を作成した。作成にあたっては、3年生の臨地実習で受け持つ患者の疾患などを考慮しながら、学生が慢性疾患やがん患者の多様な健康問題を理解して看護実践に結びつける能力を高められるよう配慮し、事例集としてまとめて学生に配布した。ひとつの事例に対して、数グループが取り組むように割り振った。演習の進め方は、まず学生へは病名のみを伝えて病態関連図を作成させ、次に事例患者情報を提供して関連図作成、看護診断、看護計画を立案し、最後にグループ発表会を実施した。グループでひとつの関連図と看護計画を作成して提出したものを、発表会での資料として全員に配布した。発表会は学生主体で運営し、同じ事例患者の全グループが発表し、質疑応答を経た後、教員が事例ごとに評価コメントをする形式とした。

DVD教材演習群では、アセスメント演習のために作成された市販のDVD教材の中から、当該科目や演習の目的を考慮して、気管支拡張症¹³⁾、急性骨髄性白血病事例¹⁴⁾を用いた。まず疾患名のみで病態関連図を作成し、次にDVDを視聴してから関連図を作成した以外、演習の進め方は紙上患者演習群とほぼ同様であった。DVDは演習時間内に何度か再生し、希望者は繰り返して視聴できるようにした。そのため紙上患者演習群と同等のグループワーク時間を確保するのが難しくなり、発表の時間数を減らして調整することにした。しかし全てのグループに発表の機会を与えることも重要であると考え、ひとつの事例につき2グループは事例患者の看護診断抽出と立案した看護計画について発表し、残りのグループは相違点に絞って発表するよう、発表方法を工夫した。

なお、紙上患者演習群、DVD教材演習群ともに、事前に各事例患者に対して適切な看護診断を2名の教員で検討し、その中から各事例に5～6個ずつの目標看護診断を設定した。

4. 調査方法

紙上患者演習群、DVD教材演習群ともに、看

護過程演習終了時に自記式質問紙調査を行った。まず学生へ研究の趣旨と方法、倫理的配慮を記載した文書を配布し、口頭での説明を行って協力を依頼した。研究への協力は自由意志であり、協力の有無が成績に影響しないこと、また調査票は無記名であり、データはID番号で処理すること、得られたデータは研究のみに使用することを説明し、調査を実施した。調査票の回収は、その場に用意した回収箱か大学内に設置した鍵付きボックスで回収した。調査時期は、紙上患者演習群が平成25年2月、DVD教材演習群は平成26年2月だった。

5. 調査内容

調査票では、看護過程演習の有用性として、「この看護過程演習で学んだことは、今後、どのくらい役に立つと思いますか」と尋ね、「非常によく役に立つ」「まあまあ役に立つ」「どちらとも言えない」「あまり役に立たない」「まったく役に立たない」の5件法で回答を求めた。また看護過程演習の満足度、グループメンバーとの協力度についても尋ねた。看護過程演習の満足度は「非常に満足」「まあまあ満足」「どちらとも言えない」「あまり満足していない」「まったく満足していない」、グループメンバーとの協力度については「非常によく協力できた」「まあまあ協力できた」「どちらとも言えない」「あまり協力できなかった」「まったく協力できなかった」の5件法で回答を求めた。さらに看護過程演習で学んだ内容や難しかったこと、演習の感想を自由記載で尋ねた。

看護診断については、学生がグループ課題として提出した関連図を、研究に使用することに同意を得た上で、分析対象とした。

6. 分析方法

看護過程演習の有用性については、「非常によく役に立つ」「まあまあ役に立つ」「どちらとも言えない」「あまり役に立たない」「まったく役に立たない」の各回答肢に対し、順に5から1点を与え、得点が高いほど認識が高いように配点した。看護過程演習の満足度、グループメンバーとの協力度も同様に配点し、演習別の比較にはMann-WhitneyのU検定を用いた。演習

で学んだ内容や難しかったことは、意味内容の類似性、相違性からカテゴリーを作成し、演習別に比較した。分析は2名の教員で行い、合意を得た。

看護診断については、教員が事前に各事例に設定した目標看護診断数の平均、学生が抽出した看護診断数の平均、学生が抽出した看護診断のうち目標看護診断に該当した妥当看護診断数の平均、さらに妥当看護診断数を目標看護診断数で除した看護診断抽出割合を演習別に算出した。

解析には統計解析ウェア IBM SPSS 23 を用いた。検定はすべて両側検定とし、統計学的有意水準は5%未満とした。

7. 倫理的配慮

本研究はA大学倫理委員会により承認を得て実施した。

Ⅲ. 結果

応諾状況は、紙上患者演習群が調査票を配布した83名のうち、74名から回収し、回収率は89.2%だった。DVD教材演習群では、60名から回収し、回答率は72.3%だった。

表2に学生の認識からの教育効果比較を示した。看護過程の有用性についてはDVD教材演習群の方が、紙上患者演習群と比較して有意に高かった ($p=0.009$)。看護過程演習の満足度についてもDVD教材演習群の方は満足度が高い傾向にあった ($p=0.064$) が、グループメンバーとの協力は演習方法で違いがなかった。演習の感想としては、紙上患者演習群がグループワーク

や教員との関わり、演習の効果など様々な内容が含まれていたのに対し、DVD教材演習群は患者の表情や話し方がわかるので患者をイメージしやすい、文字だけの事例よりも分かりやすいといった内容が大部分であった。

学生が演習で学んだ内容のカテゴリーとして、先行研究⁷⁾の結果を参考にしながら6つのカテゴリーを抽出した。抽出したカテゴリーを【 】、実際のデータを‘ ’で示す。抽出したカテゴリーは、【疾患に関する知識】、【看護過程の展開方法や看護援助内容】、【慢性疾患やがん患者の特徴や看護援助の考え方】、【グループ学習の効果や重要性】、【発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき】、【学習結果を比較することによる新たな気づき】であり、紙上患者演習群、DVD教材演習群でカテゴリーに違いはなかった。【発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき】では、他のグループのグループワーク結果を自分たちと比較することにより、‘自分のグループではなかった考え方や意見が聞けて勉強になった’‘自分たちが考えつかなかった視点でのアセスメントからの診断で、参考になった’などが挙がっていた。【学習結果を比較することによる新たな気づき】では、‘抽出した看護問題がそれぞれ違い、根拠となったことを聞くと納得できた’、‘同じ事例でも看護問題が違ったり、同じでも計画のところ少し違ったりして、色々な考え方、見方があるのだなと思った’などが挙がっていた。

表2 学生の認識からの教育効果比較

項目	紙上患者演習群 平均±SD	DVD教材演習群 平均±SD	p値
看護過程演習の有用性	4.3 ± 0.6 ^{a)}	4.5 ± 0.6 ^{b)}	0.009
看護過程演習の満足度	4.0 ± 0.6 ^{a)}	4.2 ± 0.7 ^{b)}	0.064
グループメンバーとの協力度	4.3 ± 0.7 ^{c)}	4.3 ± 0.7 ^{d)}	0.817

Mann-Whitney の U 検定

a) n=73, b) n=59, c) n=71, d) n=57

表3 学生が演習で学んだ内容の演習別回答割合

カテゴリー名	紙上患者演習群 (n=74)		DVD 教材演習群 (n=54)	
	回答数 *	%	回答数 *	%
疾患に関する知識	21	16.7%	8	8.0%
看護過程の展開方法や看護援助内容	28	22.2%	12	12.0%
慢性疾患やがん患者の特徴や看護援助の考え方	11	8.7%	4	4.0%
グループ学習の効果や重要性	21	16.7%	20	20.0%
発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき	22	17.5%	35	35.0%
学習結果を比較することによる新たな気づき	23	18.3%	21	21.0%
合計	126	100%	100	100%

* 複数回答

表4 看護過程演習で難しかった内容

カテゴリー名	紙上患者演習群 (n=29)		DVD 教材演習群 (n=23)	
	回答数 *	%	回答数 *	%
疾患や治療の理解	6	18.2%	6	27.3%
看護過程の展開方法	20	60.6%	12	54.5%
患者の個別性の理解	3	9.1%	0	0.0%
グループメンバーとの協力	3	9.1%	3	13.6%
その他	1	3.0%	1	4.5%
合計	33	100%	100	100%

* 複数回答

表3に学生が演習で学んだ内容の演習別回答割合を示した。紙上患者演習群では、【慢性疾患やがん患者の特徴や看護援助の考え方】以外は、回答割合はどれも20%前後で大きな差はなかったが、DVD教材演習群では【発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき】が35%を占め、次に【学習結果を比較することによる新たな気づき】、【グループ学習の効果や重要性】と続いた。

表4に看護過程演習で難しかった内容を示した。【疾患や治療の理解】、【看護過程の展開方法】、【患者の個別性の理解】、【グループメンバーとの協力】のカテゴリーを抽出した。紙上患者演習群、DVD教材演習群ともに【看護過程の展開方法】の回答が多かった。

表5に演習方法別の看護診断の結果を示した。教員が設定した目標看護診断数は、紙上患者演習群、DVD教材演習群ともに、平均5.5±0.5個（範囲5-6）だった。紙上患者演習群で

学生が抽出した看護診断数の平均は4.6±1.1、妥当看護診断数の平均は2.5±1.1、看護診断抽出割合は、45.4±19.1%だった。DVD教材演習群では学生が抽出した看護診断数の平均は3.8±1.5、妥当看護診断数の平均は2.9±1.3、看護診断抽出割合は54.2±26.3%だった。

IV. 考察

本研究で行った紙上患者演習群とDVD教材演習群の看護過程演習の教育効果と今後の課題について、これらの演習に対する学生の評価、学習目標達成、看護診断抽出の観点から考察する。

1. DVD教材演習と紙上患者演習に対する学生の評価

看護過程演習の有用性については、DVD教材演習群の方が学生の評価が高かった。学生の演習に対する感想でも、DVD教材は実際に患者の表情や話し方などを観察できることなどからわかりやすい、イメージしやすいと支持する意見

表 5 演習方法別の看護診断結果

項目	紙上患者演習群	DVD 教材演習群	p 値
	(n=15) * 平均±SD	(n=15) * 平均±SD	
目標看護診断数 ^{a)}	5.5 ± 0.5	5.5 ± 0.5	0.775
学生が抽出した看護診断数	4.6 ± 1.1	3.8 ± 1.5	0.187
妥当看護診断数 ^{b)}	2.5 ± 1.1	2.9 ± 1.3	0.367
看護診断抽出割合 (%) ^{c)}	45.4 ± 19.1	54.2 ± 26.3	0.486

Mann-Whitney の U 検定

a) 教員が各事例に設定した抽出目標の診断

b) 学生が抽出した診断のうち, a) に該当する診断数

c) 妥当診断抽出数 (b) / 看護診断目標数 (a)

* グループ数を示す

が多かったことより、患者の全体像の把握がし易かったと推察され、ゆえに看護過程演習の満足度も DVD 教材演習群の方が高い傾向を示したと考える。片山ら¹²⁾は、基礎看護学の看護過程の講義内で、視聴覚教材を精選して2分間の教材を作成し、看護過程を初めて学ぶ学生に視聴させた際の学習効果を報告している。映像の看護場面を見た後、学生は事例患者に対して実践したい看護ケアを14あまり挙げることができ、その内容は生理的ニーズや不安、さらにその人らしい生活というように多岐にわたっていたことが報告されている。このように視聴覚教材は、視覚的、聴覚的情報から得られる情報量の多さが、学生の理解しやすさにつながるため、看護過程演習の教材として有用である可能性が示唆された。

2. 学習目標達成の観点からの教育効果

学生が看護過程演習で学んだ内容は、紙上患者演習群と DVD 教材演習群から抽出したカテゴリーに違いがなかった。【疾患に関する知識】、【看護過程の展開方法や看護援助内容】、【慢性疾患やがん患者の特徴や看護援助の考え方】のカテゴリーが抽出できたことは、看護過程演習で学生が、成人慢性期患者の看護に必要な知識や思考を学んだと認識していることを示している。また【グループ学習の効果や重要性】のカテゴリーからは、グループワーク形式で演習を行っていくことにより、学生同士で協力する効

果や重要性を学んでいたことが推察される。加えて、グループメンバーとの協力も、紙上患者演習群と DVD 教材演習群で有意な差は認められなかった。従って、紙上患者演習群、DVD 教材演習群のどちらからも、演習の学習目標の内容と合致したカテゴリーが抽出できたことは、学習目標の内容を網羅しているという点で、学習目標をある程度、達成できていると考えられる。さらに学習目標以外にも、【発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき】、【学習結果を比較することによる新たな気づき】から、学習成果を発表し合うことで、学生は自分たちでは考え至らなかった点について気がつき、考え方の多様性を学んだ様子が伺えた。

しかしながら、看護過程演習で学んだ内容の回答割合は紙上患者演習群と DVD 教材演習群で異なっていた。この理由としては教材の違いというよりも、演習方法の違いが影響していると考えられた。紙上患者演習群は各カテゴリーの回答割合が【慢性疾患やがん患者の特徴や看護援助の考え方】が低かった以外、大きな差が見られなかった。紙上患者演習群の演習方法では、患者事例数が多く、疾患も多様で、さらに発表時間も DVD 教材演習群よりも長く確保できたため、学生が演習で学んだ内容が多岐に及んでいたといえよう。対して、DVD 教材演習群では【発表を聞くことによる自分とは違う考えがあることへの気づき】の35%から【慢性疾患やがん患

者の特徴や看護援助の考え方】の4%まで、回答割合に大きな差が見られた。DVD教材演習は2事例としたため、結果として同じ事例の発表が多くなったこと、さらに発表方法を2つのグループのみ自分たちが考えた看護診断の抽出、看護計画を発表するが、残りのグループは先の発表との相違点のみを発表する形式が、学生に自分とは違う考え方の存在を意識させる結果につながったのかもしれない。自分の学習を振り返りながら、グループ発表を聞き、比較することは、学生の問題解決能力の向上につながる可能性も考えられる。

看護過程の展開という点では、演習で学んだ内容として看護過程の展開方法や看護援助内容を挙げた学生は、紙上患者演習群22.2%、DVD教材演習群12.0%と非常に低かった。これにはグループ発表直後に調査協力を依頼し、調査票を配布しているため、グループ発表に対する学生の印象が強かったことが考えられる。しかし先行研究^{6),8)}と同様、看護過程演習で難しかった内容として、どちらの演習でも【看護過程の展開方法】に関するものが非常に多かったことも併せると、本調査結果は、どちらの教材を用いるにしても、学生の看護過程の展開方法の理解を高める教育方法の検討が必要であり、課題があることを示している。本研究では、看護過程演習は80名を超える学生を2名の教員で指導しており、十分な指導ができたとは言いがたい。指導教員の教育能力の向上や教員の確保、さらに効果的な教育方法の検討が必要と思われる。

3. 看護診断抽出の観点からの教育効果

看護診断の抽出は、記述統計上はDVD教材演習群の方が妥当な看護診断抽出割合が高かったが、統計的に有意な差があるとは言えなかった。これにはサンプルサイズが小さいため、検出力が低かったことが影響している可能性がある。今後、データを追加し、検討していく必要がある。

4. 本研究の限界と今後の課題

紙上患者演習群とDVD教材演習群の効果を比較するにあたり、本研究ではA大学のカリキュラム内で実施する看護過程演習を、連続横断的

な研究デザインを用いて検討した。従って、本研究にはいくつかの限界が挙げられる。

まずDVD教材演習群の方が紙上患者演習群に比べて、看護過程演習の有用性に対する学生の認識が高かったが、ふたつの演習ともに同じ教員が指導していた。したがってあとに行ったDVD教材演習時の方が、学生が看護過程展開を理解するための教員の指導技術が向上し、このような差をもたらした可能性も否定できない。またDVD教材演習群の方が回答率は低いことから、回収率の差によるバイアスが生じていたのかもしれない。さらに紙上患者演習群とDVD教材演習群では、それぞれ複数の事例を用いており、目標看護診断数には有意な差がなかったものの、事例の難易度に差が生じていた可能性も考えられる。いずれにしても事例数や疾患を統一して比較研究を行うことが必要である。

本研究では、学生の認知面や学習目標との合致、看護診断抽出の観点から紙上患者演習群とDVD教材演習群の教育効果を検討したが、これ以外にもより客観的な評価を含めて、多角的に教育評価を行っていくことが重要である。両群ともに看護過程演習で難しかったこととして、【看護過程の展開方法】が挙げられていたことから、学生の看護過程展開の能力を高めるための教育方法の洗練が必要なことも伺える。

今後、視聴覚教材の看護過程演習への活用を考えると、現在、入手可能な教材はそう多くない。今後、看護過程演習で用いることが可能な、様々な内容やレベルの視聴覚教材が多く開発され、学生の学習ニーズに合致した教材選択の幅を広げていくことも必要と考える。

V. 結論

成人慢性期の紙上患者演習とDVD教材演習を行い、教育効果を学生の認識、学習目標の達成、看護診断抽出から検討した。その結果、学生は情報量の多いDVD教材演習の方が理解しやすく、看護過程演習の有用性に対する認識が高く、その他の教育効果の面で大きな違いがなかったことから、紙上患者教材よりも教育効果が高い可能性が示唆された。今後は看護過程演習の教育

方法の洗練,より多角的な教育評価方法の検討,教材開発の必要性があると考えられた。

文献

- 1) 松山友子, 穴沢小百合. わが国の看護基礎教育課程における看護過程に関する研究の動向 1991～2002年に発表された文献の分析. 国立看護大学校研究紀要. 2004; 3(1):44-53.
- 2) 豊島由樹子, 澤田和美, 西堀好恵, 他. 紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第1報)-看護過程演習前後における学生の自己評価-. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2003;(11):127-138.
- 3) 豊島由樹子, 伊藤ふみ子, 萩弓枝, 他. 紙上事例を用いた成人看護学看護過程演習の評価(第3報)関連図を取り入れた演習における学生の自己評価の変化. 聖隷クリストファー大学看護学部紀要. 2005;(13):81-90.
- 4) 石塚敏子. 看護過程のアセスメント段階における学生の理解度を高める教授法の検討. 新潟医療福祉学会誌. 2007; 7(1):10-19.
- 5) 柴田和恵, 前田明子, 大野和美, 他. 成人看護学看護過程演習の評価 - 自己評価による学習到達度と授業評価アンケートより -. 天使大学紀要. 2011;11:29-37.
- 6) 岩月すみ江, 武分祥子, 所澤好美. 看護過程演習における評価と課題-成人看護学実習前演習の振り返り用紙の分析-. 飯田女子短期大学紀要. 2008;25:179-190.
- 7) 佐藤栄子, 小野千沙子. 慢性期患者事例を用いた看護過程演習の効果と課題-複数の患者事例導入の試み-. 桐生大学紀要. 2013;(24):117-125.
- 8) 内海香子, 鈴木純恵, 佐藤佳子, 他. 看護系A大学の学生が認識する成人看護学領域での看護過程演習における困難と指導方法の検討. 獨協医科大学看護学部紀要. 2014;7:23-37.
- 9) 石川りみ子, 上間直子, 金城利香, 他. 成人保健看護における看護過程演習の臨床実習への学習効果. 沖縄県立看護大学紀要. 2002;(3):85-93.
- 10) 小野千沙子, 佐藤栄子. 成人慢性期看護過程演習の長期的学習効果-臨地実習後の学生の認識からの評価-. 桐生大学紀要. 2014;(25):39-45.
- 11) 佐藤みつ子, 宇佐美千恵子, 青木康子. 看護教育における授業設計. 医学書院; 2009. 163-177.
- 12) 片山由加里, 梶谷佳子, 中橋苗代, 他. 看護基礎教育における看護過程の学習効果に基づく視聴覚教材の検討. 看護診断. 2013;18(1):16-27.
- 13) 青木きよ子監修. 看護のためのアセスメント事例集 Vol. 8 慢性呼吸不全患者の看護事例. 医学映像教育センター; 2012.
- 14) 熊坂隆行監修. 看護のためのアセスメント事例集 Vol. 10 急性骨髄性白血病の患者の看護事例. 医学映像教育センター; 2012.

Educational effectiveness of nursing process seminar for adult chronic phase patients: Comparison of on-paper case reports and DVD-based case materials

Eiko Sato¹⁾, Chisako Ono²⁾

¹⁾ Department of Nursing, Ashikaga Institute of Technology

²⁾ Faculty of Health Care, Takasaki University of Health and Welfare

Abstract

【Purpose】 The purpose of this study was to compare the educational effectiveness of on-paper adult chronic phase patient case reports and DVD-based case materials in a nursing process seminar.

【Methods】 Participants were 2nd year students at A University Nursing Department, who participated in a nursing process seminar in group work format, and completed a questionnaire survey after the seminar. Two seminars were conducted. In the 2012 academic year, 83 students participated in a seminar using on-paper case reports designed by researchers. In the 2013 academic year, a second group of 83 students participated in a seminar using commercially available DVD-based case materials. Students were asked about the usefulness of the seminar, their level of satisfaction, level of cooperation with group members, and content learned through the seminar, and the results of each seminar were compared.

【Result】 Student evaluation of the seminars showed that the usefulness of the DVD materials seminar was significantly higher, and level of satisfaction also tended to be higher.

【Conclusions】 The amount of visual information is greater in DVD materials, and it seems that this is highly evaluated by students, as it is easier for students who have limited practical clinical experience to have an image of patients. The study suggests that in the future, in order to improve the educational effectiveness of the nursing process seminar, it is necessary to revise seminar methods and develop DVD-based teaching materials.

Keywords: Adult nursing, chronic phase, nursing process seminar, educational effectiveness